施工者に幸あれ 第34回

「山田憲明」のアンチテーゼ

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■テナーサックス

声に魅力がある。穏やかだけれど芯のある語り口が好い感じ。父親がバイオリン，母親がピアノという音楽家一家に育ったと聞いて納得です。唄もきっとうっとり……，と思う。建築技術編集長の覇志堂も鼻にかかったなかなかの声だから，この鼎談，実に心地よい時間でありました。お父上は音楽家から転じて，世界のHINOで技術者になられたというから，血は争えないようです。2tではなく技術者二世。

ビックバンドでジャズ一辺倒だった京大時代のお話は面白くて，「サックス命」の山田憲明青年が目に浮かぶ。今はBGMで聞く程度にしか触れない。「音楽にかけた膨大な時間を，建築にかけています」と言う。この方，興味をもったものに対する集中力が人並み外れている。

■木に出会う

構造家の増田一眞先生と建築家の広瀬鎌二先生に，お茶を運んだことが幾度かある。お二人とも建築青年のように，喧々諤々としていた夜中，本物の青年であった山田憲明さんは，増田建築構造事務所の中枢として構造設計に全身全霊を捧げていたのです。音楽にかけた以上の情熱をもって。

鉄骨構造の金多潔教授，辻文三教授と脈々と続く研究室で勉学中，薬師寺大講堂の復元で初めて伝統木造に触れた。ユニークな発想力をもつ西澤英和先生からも多大な影響を受けたという構造家，山田憲明さん。この辺りのことは，編集長覇志堂が凄く詳しいので，いずれまたお届けしたい。

古都での生活が，少なからず影響したのではと思う。楽器を木に持ち替えて，大学院では物足りないと（私見なり），構造家の増田一眞先生の元に。それから15年間，事務所中央のちゃぶ台で，師匠に「厳しくも温かく育てていただいた」。お食事付きで，居心地もよかったのでしょうね（覇志堂が証人）。

■木を読む

第22回JSCA賞作品賞（国際教育大学図書館棟/設計：仙田満＋環境デザイン・コスモス企業体），第7回日本構造デザイン賞（東北大学大学院環境科学研究科エコラボ/設計：ササキ設計）と立て続けの受賞は，満を持しての独立のはなむけとなりました。当然ながら，仕事のオファーは多いはず。が，「それまでのお付き合いに重きを置きたい。昔からお世話になっている人を大切にしたい」という，侍です。たまたま，鼎談の翌日，増田事務所時代から付き合いのあるという建築家・新関謙一郎さんに聞くと，「才能ありますよ〜，カレ！」と，山田憲明ファン倶楽部所属なのでした。

普通に流通している短く細い製材を使って，大きな建物を構築する。設計時に多少手間暇がかかっても，手に入りやすいものを使って，面白い空間を造形する。山田憲明構造は，伝統の大工技術を駆使しなければできないし，この先，熟練の職人がいなくなってしまうなぁ，と心配になる。が，例えばフンデカー社（ドイツ）の加工機械は，三次元のCADを使ってかなり精巧にプレカットすることが可能だという。

施工の世界では，機械を操る施工技術者が，名工と呼ばれる日も近い。日本の伝統技術が，外国のマシンによって蘇り，継承されていくのです。

覇志堂編集長，「ライバルは?」と直球。「建築家と組むプロポーザルでは，現在活躍中の構造家と出会いますけれど，考えの違うマット上で戦っているから，共存共栄って感じですかね」。

建築家，同時代の構造家，近未来の機械たちとも，心地よくセッションするけど，師匠譲りの気質は見え隠れしている。「15年」はちょっと長すぎでも，子飼いのお弟子さんが羽ばたく未来も楽しみ。構造家・山田憲明は悠々と，今の建築へアンチテーゼする。